

no.13

CLCからしだね書店便り



CLCからしだね書店では…

- 1 キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- 2 お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書のコーナー始めました。ほりだしものがあります。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。



『廃用身』

著者 久坂部 羊
幻冬舎文庫

グロテスクとは…

私がこの小説の文庫本を取り上げたのは、文庫本には春日武彦氏の「解説」がついているからです。―そのことを前提にして、まずは久坂部羊著「廃用身」という「小説」の概要をご紹介します。

この「小説」は、主人公、漆原科医師の「手記」とその手記の編集者である矢倉俊太郎の「編集部註」だけで成り立つ「小説」です。小説ですから当然、フィクションなのですが、漆原の手記は善良なお医者さんと老人デイケアに集まってくるお年寄り、デイケアで働く職員たちの介護をめぐる日常を親しみやすくわかりやすい言葉で綴った「手記」として登場し、矢倉の「編集部註」はルポライターの視点の客観的な「註釈」として登場します。

「廃用身」とは、介護の現場で使われる医学用語で、脳梗塞などの麻痺で回復の見込みがない手足のことです。

小説の手記は、こんなふうに始まります。が、現実には「廃用身」なる医学用語はないし、介護の現場で実際に用いられる言葉でもありません。（「廃用症候群」という言葉はあります）

漆原医師の手記は、デイケアに通うお年寄りたちの「廃用身」を切断するという衝撃的な介護法(?)を、「A (Amputation 切断) ケア」と呼び、「本人と家族が希望し、日常生活の動作が改善され、介護の軽減が見込まれ、QOL (生活の質) の向上が見込まれるのなら、Aケアに踏み切ってもよいのではないか」と自分を納得させ、デイケアスタッフを納得させ、家族を納得させ、お年寄りを納得させていく様子が綴られます。最後は少子高齢化する社会の究極の介護法「Aケア」を普及させるパイオニアとしての役割を自分自身に位置づけて、手記は終わります。

これだけを読むと、まるでマッドドクターの独善的で奇抜な回顧録のように思われるかもしれません。しかし、彼の手記はたいへん現実的な説得力をもっているのです。「小説」として読む私たち読者でさえ、ふと「なるほど」と思わせてしまう力があります。

ネタバレをすると、「Aケア」は法に触れるものであり、マスコミや世間が喜んで飛びつきそうな事件であったために、漆原医師はさんざんたたかれた挙句に、自殺に追いやられます。

漆原医師の死後、手記の出版を勧めた編集者の矢倉が、Aケアと漆原医師に関する顛末を「編集部註」としてルポルターージュ風に書き上げ、手記本は完結し、この小説も終わります。

小説「廃用身」を読み終わった私は、なんとも奇妙で不安定な気持ちになりました。おそらくこの小説は、あらすじをネタバレしてもなんの問題もないでしょう。ストーリーのおもしろさ以上に、登場人物たちの何気ない言葉や行動、Aケアを選択していくプロセスが、漆原と矢倉によって、巧妙に読者一人ひとりの頭と心に揺さぶりをかけ、不安定にさせます。作者久坂部羊の筆力はすごいなあと、あらためて思います。

読み終わった後の不安定さに、少なからず安定を与えてくれるのが、文庫本にしかない春日武彦氏の「解説」です。春日武彦は解説の中でこんなことを言っています。

本書を語るうえでこのキーワードは、おそらくグロテスクといった言葉であろう。いったいグロテスクとはどのようなことを意味するのだろうか。

酸鼻な光景が展開されたり、フリークスが登場したり、猟奇やアブノーマルが描かれれば自動的にグロテスクになる訳ではない。

では、グロテスクがさすのはどういったものであるのか。おそらくそれは、「取り返しのつかない状態に対する無自覚さ」ではないのか。そのような精神のありようこそが、根源的な不快感に通じているのではないか。

世の中で何がもつとも嫌かと言えば、それは「ああ、もはや取り返しがつかない……」といった感覚である、少なくともわたしにとっては。自分が死ぬ瞬間にそういった気持ちになったら想像するだけでおぞましいし、たとえば電動ノコギリでうっかり指の一本を切り落としてしまったとしたら、そのとき指のかけた自分の手を不思議そうに眺めながら「ああ、もはや取返しがつかない……」と間抜けな声でつぶやくに違いないのである。

取返しがつかないという実感は、そこに叫びや慟哭や悲しみが伴えば、曲がりなりにもひとつの不幸として受け入れることが出来る。ところがそうしたリアクションが欠落しているとき、事態は日常に対する異物として機能するようになる。指を失くしたまま何事も無かったかのように鼻歌交じりに電動ノコギリを扱っている者の姿はグロテスクであるし、指を失くした者に対して平然と作業続行を命じるものがあったとしたらその人間もまたグロテスクであろう。自殺マニアはあまりにも淡々と自分の命を弄ぶその無表情さがグロテスクであるし、小児性愛者は相手の心へ及ぼす深刻な影響力への自覚を欠いているからグロテ

スクなのである。

おしなべてグロテスクは鈍感さとか部分的な感情の欠落といったものに関連する。悪意や憎悪がそのままグロテスクに化すとは限らない。むしろ善意とか正義が暴走したときのほうが、グロテスクは現出しがちとなるだろう。善意や正義は、自らを検証することなく他者を「もはや取り返しのない状態」へと追い込んでしまいでるのだから。

グロテスクの根源のような扱われ方をした漆原医師は「悪者」になって自殺しますが、「正義」「正論」を振りかざして漆原をたたいたマスコミや有識者、世間のグロテスクさも、もはや取り返しがつかない何かを無自覚に失いながら、どんどん加速し、不快感を増す要因になっていきます。

グロテスクは、むしろ一見、良さそうなものの中に紛れ込みます。だから誰かが「正義」「善意」「愛」などという言葉を用いても簡単に使いこなしながら、自分たちの主義主張をもっともらしく語り始めたときに、私たちは一番警戒しなければならないのです。

デイケアの職員の中には、そのグロテスクさに反応し、デイケアを辞めていく人も登場します。彼女は声高に反対したわけではありません。「自分は感情に流され、理性的な判断ができていないのではないか？」と恥じながら辞めていったようにも描かれています。ただ自分の中に生じた本能的な不快感、グロテスクへの拒絶を無かったものにせず、周囲の空気や自分自身の弱さに抗い続けたのは彼女のような平凡な少数者でした。この小説に救いがあると思えば、そこかなと思います。

意地悪なことを言います。

どうぞ、皆様、この小説を読んで、自分自身を探ってみてください。登場人物に共感するか、反感を持つか。共感するとしたら、反感を持つとしたら、それはなぜか。大いに揺さぶられながら不快感に苛まれながら考えてみるというのも、グロテスクな時代に生きる私たちには必要なことなのかもしれないと、ひそかに思っています。

(CLCからしだね書店 店長)



【最終】トシキの脚絵をひいて

最終回

第12回：「嫌われ者」の意地

カイくんは一昔前の漫画やアニメが大好きな飄々とした男子中学生です。学校には通っていますが、所属するクラスに馴染めず、別室登校をしています。ここで言う「別室」とは、自分に割り当てられた教室に馴染めなかった生徒が代わりに登校する場所です。今回はそんな別室での物語です。

これは私自身が経験したことや、心理士仲間から聞いたエピソードをミックスしたフィクションですが、出来事の本質は変えていません。教室に入れない（入らない）生徒たちは、「ただサボっている」とか、「気楽に遊んでいる」わけじゃないこと、自分なりの意志や感情を持って、日々葛藤と向き合っていることを伝えられればと思います。

さて、別室にはいつも何人かの生徒たちと、地域のボランティアさんがいました。カイくんはそこにやって来たのです。いつも仏頂面で、「かんたんに人を信用しないぞ」とでも言うような警戒心のこもった表情をしています。でも、趣味の漫画の話をする時はパッと笑顔になり、少年らしい無邪気な表情を見せてくれました。彼は一昔前の漫画が好きなので、年上のボランティアと話す時の方が、なんだかん馬が合つのだそうです。

学校の人間関係や勉強の話になると、彼はまた別の険しい表情を見せます。「どいつもこいつもくだらない」。そう彼は言いました。自分の見た目や趣味のことをバカにしたり、下に見てくるようなやつばかりだ、と言っているのです。多くは語りませんが、彼が学校生活の中でたくさん傷を負ってきたことを想像させる口ぶりでした。

そんな別室の中で、「給食をどうするか」というのはいつも少し気まずい問題になりました。給食は各教室に運ばれますが、別室には来ません。ですから、周囲の視線に耐えつつ階段を上り下りし、廊下を

臨床心理士
坂岡 大路

1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童デイサービスなどでのボランティア経験を経て、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019～2021年『成長』（いのちのことは社）誌に「3人の学ぶ教会学校」を連載。

歩き通し、自分のクラスまで給食だけを取りに向かわないといけない。これは結構辛いです。目立ちますし、「恥をしのんで」「コンコンと、後ろめたさを感じながら取りに行く格好になってしまふ。バカにするように笑ってくる生徒もいます。そこで、ボランティアさんが給食を教室まで取りに行くというのが、なんとなくの慣例になっていました。

ところが、ある日の別室ではその慣例が通用しませんでした。ボランティアが一人しかおらず、人手不足だったのです。これでは給食を運びきれません。だれともなく、「困ったな…」とつぶやきました。自分で取りに行ければいいのですが、クラスメートから浴びせられる視線を恐れて、だれも声を上げられません。

その時、カイくんがサラッと言いました。

「俺が取りに行つてやるよ。どうせ嫌われてるし、これ以上評価の下がりようがないだろ。同じだよ。」カイくんは無表情でした。でも、きつと怖くないわけはなかったと思います。「嫌われている」という主張がどこまで事実かわかりませんが、少なくとも彼の心の中では、「教室のやつらはみんな敵」です。そういう主観的な世界を生きているのです。にもかかわらず、別室のみんなで昼ごはんを食べられるようにするために、給食を取りに行こうとした。恐怖を乗り越えて、覚悟を決めた。ここまででは、きつと本当のことです。

仮に給食を食べるのが自分しかいなかったらどうなっていたでしょう。「武士は食わねど高楊枝」じゃありませんが、「コンコン取りに行くくらいだったら、給食なんて食わないほうがまし。別にオレ腹減っていないし」。そんなことを、彼なら言いそうです。でも、「だれかのため」「何かのため」という目的があったなら。それは恐怖を乗り越える理由になる。私はその時の彼の振る舞いに、「嫌われ者の意地」を垣間見た気がしました。

不思議なことに、彼はこの一件以来、徐々に教室に戻るようになります。どこか、腹をくくったように見えました。そして、自分なりの興味を追求できる進路を見つけて、しっかりと進学していったのです。(最後までクラスの友達は少なかったようですが…もはやそれは彼にとってどうでもいいことでしょう。)

「別室」でのボランティア経験を通して、私は様々な人間模様と感情の交錯、コンプレックス、不安と葛藤に揺れる生徒たちの姿を見聞きました。正直言って、大したことは何もできませんでした。でも一つだけ、その後もずっと心に残り続けている学びがあります。

それは、「誇り」の大切さです。「使命感」と言い換えてもいいかもしれませんが、「ただ楽しい」とか、「ただ楽しい」ということは、決して人を本当には「楽」にしない。誰かのため、何かのためにやること。やりがいのあることをしたい。みんなにとって意味のあること、価値があることをしたい。「何か良いもの」をみんなにもたらしたい。役に立ちたい。「ただ給食を持って来てもらってる」とか、「助けてもらってる」とか、そういう受け身じゃなく、自分の存在や行為が、メンバー一人ひとりのためになっている。誰しも、そんな風に思いたいです。

どんなにエネルギーが減っていて、傷ついていて、「どうでもいい」と投げやりな様子に見えたとしても、「誰かのため・何かのためになりたい」という思いはあるかもしれない。「誇り」とは、こうした人間らしい望みが回復されることです。

ただ不安を回避することが「回復」ではない。むしろ、「意味のある誇り」があれば、人は不安をブレイクスルーして、たくましく歩んでいけるのです。子どもに恥をかかせないこと。尊厳を持って生活する権利を奪わないこと。それがどれだけ大事なことになるのか、私はよくわかっていませんでした。「別室」でエネルギーを回復し、教室に戻るようになることが正しい。そんな漠然とした構図が、当時の自分の頭の中にはあったと思います。しかし、冷静に振り返ってみるとどうでしょう。「別室」Ⅱ「教室に馴染めなかった無力な生徒が来る」ところ・「助けてあげないといけない人がいる」ところ」という、あまりに単純すぎる図式に、どこか歪んだものを感じます。それは、彼らの誇りを貶めていないか。プライドをじわじわと蝕んでいなかったか…。そんな風に、當時を回顧したくなります。

カイくんは、そんな私の認識をぶち壊してくれました。「教室」を、「自分が脱落した場所」としてではなく、「みんなのために立ち向かう場所」とリフレームしたのです。教室は今や、彼にとって意味ある「受

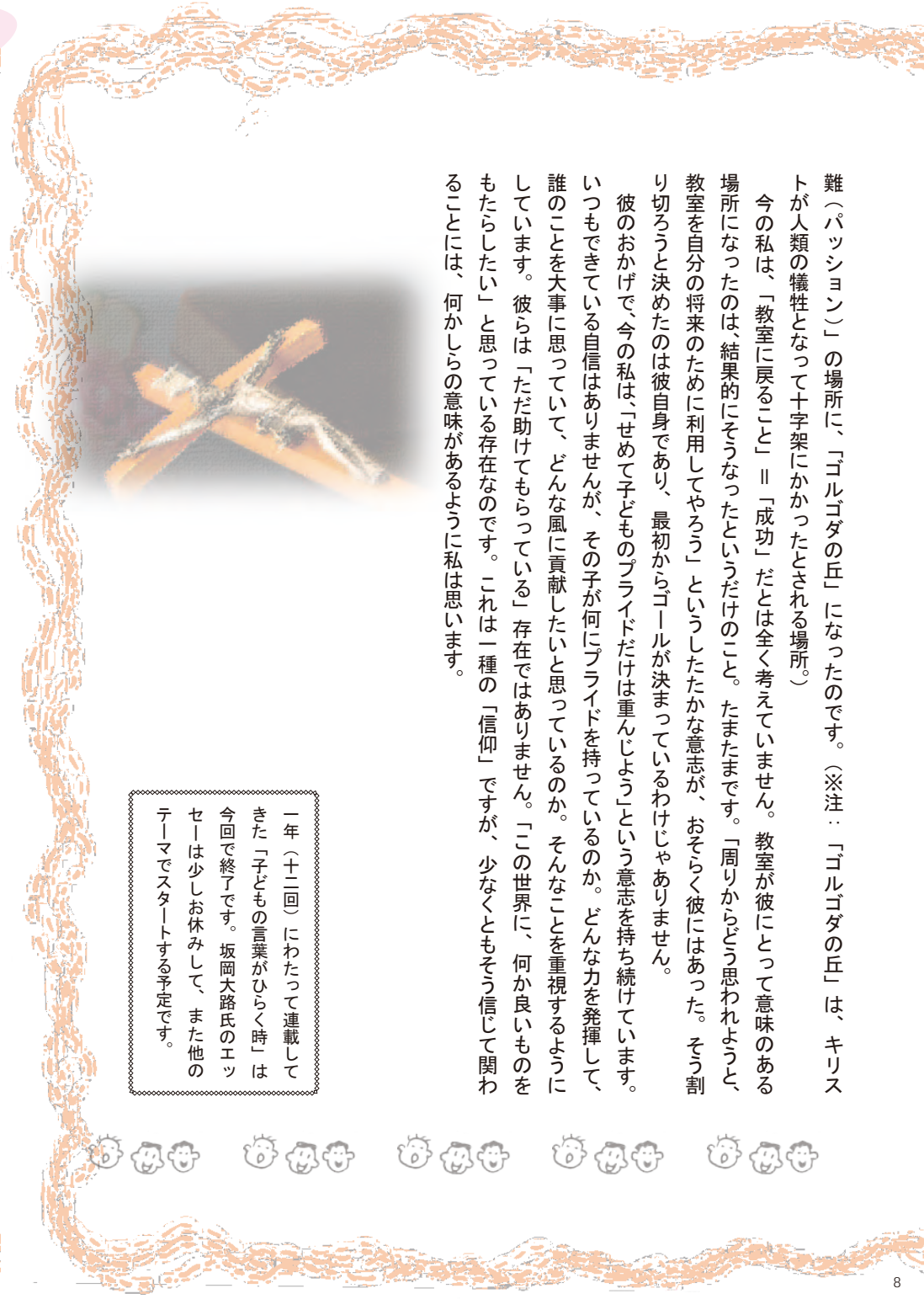


難（パッション）」の場所に、「ゴルゴダの丘」になったのです。（※注：「ゴルゴダの丘」は、キリストが人類の犠牲となって十字架にかかったとされる場所。）

今の私は、「教室に戻ること」＝「成功」だと全く考えていません。教室が彼にとって意味のある場所になったのは、結果的にそうなったというだけのこと。たまたまです。「周りからどう思われようと、教室を自分の将来のために利用してやろう」というしたたかな意志が、おそらく彼にはあった。そう割り切ろうと決めたのは彼自身であり、最初から「ゴールが決まっているわけじゃありません」。

彼のおかげで、今の私は、「せめて子どものプライドだけは重んじよう」という意志を持ち続けています。いつもできている自信はありませんが、その子が何にプライドを持っているのか。どんな力を発揮して、誰のことを大事に思っていて、どんな風に貢献したいと思っているのか。そんなことを重視するようにしています。彼らは「ただ助けてもらっている」存在ではありません。「この世界に、何か良いものをもたらしたい」と思っている存在なのです。これは一種の「信仰」ですが、少なくともそう信じて関わることには、何かしらの意味があるように私は思います。

一年（十二回）にわたって連載してきた「子どもの言葉がひらく時」は今回で終了です。坂岡大路氏のエッセーは少しお休みして、また他のテーマでスタートする予定です。



からだね書店は、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりしています。

からだね書店
障害者の支援
からだね書店



京都市東部障害者地域生活支援センター・からだねセンター主任
武山 世里子（精神保健福祉士・相談支援専門員）

新しい年になりました。からだね書店だよりの連載を始め、1年が過ぎようとしています。からだねで出会った人たちの「喪失」と「希望」をシェアする機会をいただき、彼らの喪失や悲嘆の中に、希望の光が照らされていたことを改めて実感しています。毎回毎回を手探りで書いていますが、これからもぜひおつきあいいただければ…。今年もよろしく願います。

今日の主人公は「毒舌バービーさん」です。彼女は25歳の女性です。「高校生」といっても誰もが納得するような、バービー人形のようなかわいらしい外見で、長い手足の長身でミニスカートをはいた彼女は、どこかの雑誌のモデルさんのようです。彼女は、過去に受けた傷や、発達障害の障害特性から、触れられない物やできないことがたくさんあり、それを誰かに手伝ってもらわないと生活に不具合が生じてしまいます。ヘルパーさんに家事を手伝ってもらいながら、地域で何とか一人暮らしを続けています。

「毒舌バービーさん」の毒

ある日、彼女から連絡が入りました。「あんなあ、役所の担当者むかつくし、取り替えてくれへんか。あのおっさんは合わへんし、今後一切かわりたくないねん。」その理由を聞いてみると、本来彼女が提出しないといけない書類が提出できておらず、役所の担当者に提出するように言われた、その口調が事務的で腹が立ったようです。

また別の日には、「こんな連絡が入りました。「虫が家の中に入り込んだから、今すぐ捕まえに来て」「買い物に来たけど、ぎょうさん買い過ぎて帰るのが大変。車出して。」

いつも彼女の一方的なタイミングで、対応することが難しいものばかりです。そして、彼女のタイミングで動けない時には、「お前さ、使えへんわ」という敵しい言葉が飛んできます。

この言葉の響きはなかなかの破壊力で、この言葉が発せられると、彼女の支援者である私は、少なからずダメージを受けてしまいます。そのために、彼女とは常に心理的に距離を置くようになってしまいました。彼女ときちんと対話することをせず、つかず離れず、必要最低限の関わりで支援する…。そんな状況が続いていました。

厳しい幼少期

彼女はこうしてこのような厳しい言葉で周囲の人たちを切りつけてしまうのか…。それには彼女の生い立ちも関係しているようです。彼女は虐待を受けて育ちました。彼女の保護者は、幼い彼女が思い通りにならない時に、やり場のない怒りを、虐待という形でぶつけてしまったのです。泣き叫ぶ彼女を洗濯機の中に閉じ込めてしまったり、食事の入った食器を彼女の目の前で床に投げつけたり、掃除機の長い柄で彼女をたたいたり…。その経験から、彼女にとって洗濯機や掃除機は恐怖の対象になってしまいました。

隣家からの通報で「児童虐待」として保護された彼女は、小学校低学年の頃から施設で暮らすようになりました。祖母との二人きりの世界しか知らない彼女は、他者がいっばいの環境に適応できず、ここでは別の種類のつらい日々を過ごしました。発達障害の特性もあり、大きな音や見通しのきかないことに大きなストレスを感じました。極度の偏食があり、施設の食事はほとんど食べることができませんでした。それに加え、虐待のフラッシュバックにも苦しみました。

喪失から学んだもの

厳しい幼少期を送った彼女は、自分自身が愛されるべき存在である、ということを感じることができずに大きくなりました。周囲の人を信頼する、ということもできなくなりました。そんな自分を社会が助けてくれるなんて思ってもみなかったでしょう。自分への信頼、他者への信頼、社会への信頼を喪失していました。

彼女は、誰かと関わる時、その人物が自分を傷つける人か否かを常に試しているように見えました。自分の要求に応えてくれるかどうか他者と関わりを持つ時の基準になっているようです。それには、強い口調で訴えること、「しんどい」という言葉を使うこと、そうすれば無下に拒否されることはないだろう…。これらのことを経験から学んでいました。

不安定な人間関係の中で

彼女の周りにはいる人たちは（支援者も含めて）短期間でころころと変わっていきます。他者と穏やかな、安定した関係を維持することがとても難しいのです。それは決して彼女が望んでいることではない、ということには伝わってきます。

常に誰かに腹を立てながら、常に他の誰かを求めているようでした。怒りや孤独で行き場を失っている…。そのように見えました。

彼女自身も周囲の人たちも、どうすればそこから脱出できるのかわからず、彼女が誰かとあなたたかな信頼関係を築くことはできないだろうとあきらめていました。

しかし、たとえ本人や周囲の人があきらめても、希望の光がなくなっていたわけではなかったのです。さて、その希望の光とは…。2月号をお楽しみに！



障書のこと福祉のことまで「じんな」を聞いてみました「このことがあれば、ぜひ、この書店にね書店(cic@karashidane.or.jp)までお知らせください。」

《お知らせ1》

◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文がある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。

◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させていただきます。ご相談ください。

◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思えます。

《お知らせ2》

◆からしだねの

「おすすめ本スポンサー」システム

◆あなたのイチ押しの本を、
店に置かせていただきます

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか？残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける…。そうなたらいいなと思っております。)店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。



献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただくと
ありがたいです。
(受付できないものもありますので
事前にお知らせください)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

【献本感謝】

野崎泰子様、橋爪範子様、糸井勇様、高田友紀様、寺田淑子様、戸田菜帆加様、近藤宏様・栄恵様

編集後記

◆あけましておめでとうございます。オミクロンを心配しながら年を越し、新しい年を迎えました。どうぞ本年もよろしく願い申し上げます。◆CLCからしだね書店を開業して初めてのクリスマスシーズンでした。◆書店では、皆さまからご寄贈いただいた本を、からしだねワークスの職員・利用者で一生懸命クリーニングして「古書コーナー」の棚に並べ始めました。再販が難しい本や絶版の本など、貴重なものもあり、お客様にはなかなか好評です。◆カフェではトライアングル特製のカレーうどんがメニューに加わりました。寒さ厳しい毎日ですが、美味しいお食事とちょっととなつかしい本とで、心も体も温めていただければと思います。ご来店をお待ちしております。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから

